

人の心に生きるマリア

95K067 鍋 沢 雅 子

目次

- 第1章 はじめに
- 第2章 マリアの生い立ち
- 第3章 マリアの系譜
 - (1) 大地母神の系譜
 - (2) イヴの系譜
 - (3) シェバの女王
 - (4) 聖アソナの系譜
- 第4章 民間信仰におけるマリア
 - (1) 三位一体とマリア
 - (2) 生と死とマリア
 - (3) マリア文学
 - (4) 七つの痛みのマリア
 - (5) 「黙示録」とマリア
- 第5章 おわりに
- 参考文献表

第1章 はじめに

私は、幼い頃から「マリアさま」を知っていた。通っていた「聖園マリア幼稚園」で、触れる機会が多かったからである。園庭の中央には、大きなマリア像が立っていたし、紙芝居や歌にもよく、マリアさまが登場した。聖劇のマリアさまの役は、女の子たちの憧れだったことも、よく覚えている。

こういう中で、私の自分なりのマリアさまのイメージができていったように思う。次にあげるのは、その頃園で歌っていた歌の一つである。

マリアさまの心

- 1 マリアさまのころ それは青空
私たちをつつむ 広い青空
- 2 マリアさまのころ それはうぐいす
私たちと歌う 森のうぐいす
- 3 マリアさまのころ それは山ゆり
私たちもほしい 白い山ゆり
- 4 マリアさまのころ それはサファイア
私たちをかざる 光るサファイア

これは賛美歌ではなく、幼児用に書かれた聖歌集の一つだと聞いたことがあるが、私がイメージしていたマリアさまは、ちょうど、この歌詞のようなイメージである。清らかで、美しく、優しい、そんなイメージを抱いていた。何か困った時に、神はもちろんだが、マリアさまを思うことも多かった。

しかし、マリアさまがどのような存在であったのかということを考えると、私はほとんど何も知らないことに気付く。マリアさまは、人々にとって、どんな存在だったのだろうか。ただ、「清らかで、美しく、優しい」だけだったのだろうか。たぶん、そうではないだろう。きっと、キリスト教世界で様々な立場をとってきたに違いないと思し、それは私にとって、とても興味のわくところである。その存在に近づくために、これから色々な角度から「マリア」を見ていきたいと思う。

第2章 マリアの生い立ち

新約聖書の中には、マリアについての記述があまりない。新約聖書の中でマリアが言及される部分の一覧は次の通りである。

マタイ福音書 1 : 18~25 / 2 : 1~11、13~21

マルコ福音書 3 : 31~35

ルカ福音書 1 : 26~56 / 2 : 1~7、16~19、21~39、41~51 / 11 : 27~28

ヨハネ福音書 2 : 1~12 / 19 : 25~27

使徒言行録 1 : 13~14 / 2 : 3~4

ローマ人への手紙 1 : 3

ガラテヤ人への手紙 4 : 4

ヨハネの黙示録 12 : 1~17

このように、少ない記述の中で、マリアは、どうしてキリスト教においてもっともポピュラーな存在になったのだろうか。聖人や偉人の生涯を知りたいと思うのは、いつの世でも変わらない人々の人情であり、このような人情や好奇心が、数限りない物語を生み出すことがある。キリスト教徒は、イエスとイエスを囲む人物に起こった出来事を、少しでも知りたいと思っていた。「ヨハネによる福音書」を書いたヨハネ自身、その結びにあたって、イエスの人生には自分の書き記したこと以上のことが起こったと証言している。「イエスのなさったことは、この他にも、まだまだたくさんある。その一つ一つを書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないだろう。」（ヨハネによる福音書 21 : 25）

このようなわけで、四つの福音書が書かれたときとほぼ同じころ、イエスの少年時代や、マリアの生涯を扱った読み物が次々とあらわれた。つまり、正典における資料の乏しさそのものが人々の想像力に大きな余地を残したのである。このような書物の中に新約聖書外典がある。

福音書の外典では「ヤコブ原福音書」、「偽トマス福音書」、「偽マタイ福音書」があり、そのほか聖アムブロシウスのテキストなどがよく知られている。民衆のレベルでもっとも流布していたのは、13世紀のドミニコ会士でジェノバ大司教になったヤコブス・デ・ヴォラギネによる『黄金伝説』という聖人伝である。新約聖書外典をもとにそこに描かれた、マリア誕生、マリアの清め、マリアの昇天の三つのテーマが、のちの大衆宗教文学の基盤となった。

人々の好奇心によって生まれた書物の数は、キリスト教徒の集落や共同体の数と同じくらい

無数にあったといわれる。共同体の人々は、それぞれ自分たちの聖人伝説を生み出し、それを信じ、子孫に伝え、広めていった。この種の書物は、人々の好奇心や人間感情から生まれ、共同体の繁栄、利害、心情と結びついているだけに、四つの福音書よりも強く民衆をひきつける力をもっていた。

このような書物の一つである「ヤコブ原福音書」によると、マリアは、ダビデ王の血筋にあたるヨアキムとアンナを両親として生まれた。

ヨアキムとアンナは長い間子宝に恵まれず、悲しい思いをしていた。ある過越しの祭りの日に、ヨアキムは一族の者たちとエルサレムに行き、神殿で、神に供え物を捧げようとしたが、これを拒否された。なぜなら、子宝に恵まれない者は神の呪いを受けていると考えられていたからである。

悲しみにうちひしがれたヨアキムは、妻の住むナザレには帰らず、荒野に退いた。ヨアキムは羊飼いたちと暮らしながら、四十日四十夜断食して修行する決意をする。

アンナは、子宝に恵まれないのは自分が悪いのだと自分を激しく責め、夫が帰ってこないことを深く悲しむ。ある日、アンナが庭で祈っていると、天使が現われ、アンナに、彼女の願いが聞き届けられるであろうと告げる。荒野で修行するヨアキムのもとにも天使が現われ、妻のもとに帰るようにと勧める。

ヨアキムとアンナは、エルサレムの黄金の門で再会をはたす。このとき交わした接吻によってアンナは身ごもった。九ヶ月目に女の子が生まれてマリアと名付けられた。マリアとはヘブライ語で恐らく「願い」あるいは「反抗」という意味である。または女預言者ミリアム（出エジプト記15：20）の名前に由来する。

アンナは、子供を授けてくださいと庭で祈ったとき、もし願いが聞き届けられたなら、生まれた子を神に奉仕させると誓いをたてていた。その誓いを守るために、マリアが三歳になると、アンナはマリアを神に捧げた。マリアは、そのときからヨセフのもとに嫁ぐ日までおよそ十年間神殿に留まり、神に奉仕する日々を送った。

第3章 マリアの系譜

前章では、マリアの生い立ちを簡単に見てきたが、この章では、マリアがどこから来たのか、そのルーツを探るべく、マリアに先行しマリアを準備した女神や女性の人物をみていこうと思う。

（1）大地母神の系譜

一般的に、人類の文化において、女神は神に先行していた。これはすべての神が母から生まれるためである。農耕と定住が生活の基盤となってきた社会では、穀物を生んで育む大地が母神の普遍的なイメージになった。

キリスト教の母体となったユダヤ教の形成に影響を与えたと思われる地域の古代文化を見ると、紀元前七千年のパレスチナには各住居に女神の像があったといわれる。古代アテネの中心のアゴラにも、女神が祀られていた。

紀元前六千年のシュメール文化では、雨の神エンキにたいして地の女神ニンシキルラが組み合わされた。

女神で最も人気が高く最も影響力があったのは、イーンスである。彼女は母神というほどの

権威はなく母性愛と妻の貞操のシンボルにとどまった。ただ、それだけに、一般の民衆に親しまれ、祈願の対象となった。このイーシス信仰はローマ帝国にまで広まり、5世紀に聖母マリア信仰に駆逐されるまで生きのびた。

ヨーロッパ内陸部や北部でも、キリスト教以前にやはり母神信仰が広まっていた。

時代が下がっても女神の優勢は変わらなかった。北欧をはじめとするゲルマン世界では、フライヤやフリッグと呼ばれる女神が支配していた。その他、ケルト世界のアニス、ギリシア起源のアルテミス、アナトリア起源でローマに栄えたキュベレなどがあるが、いずれも、後に聖母マリアにとってかわられるか、そのなかに融合してしまった。

聖母マリアが、このように、ヨーロッパ大陸を制覇できた理由の一つは、聖母マリアの存在に、神話的オーラが希薄だったことによっている。マリアは、新約聖書が書かれた頃の初期の神学の上では大きな存在感をもっていなかったがゆえに、先行する女神のイメージに合わせて民衆が信仰を自在につくることができたのである。また、同時に、新興宗教のキリスト教のメイン・テーマである、父と子と聖霊の三位一体という神聖不可侵の領域の枠外にいたために、そこに自由なイマジネーションが育つ可能性が残されていたといえる。

(2) イヴの系譜

ユダヤ教の経典をそのままとりいれたキリスト教は「創世記」を含む旧約聖書は、イエス・キリストの登場によって救済が完成される新約聖書を準備するものであると解釈された。旧約聖書のなかの出来事は、すべて、新約聖書の福音書の出来事を預言したものである。両者の間には、対応するものが必ずあるとされた。「創世記」にでてくる最初の人間は、アダムとイヴである。そしてアダムとイヴに対応するものが、ほかならぬイエス・キリストと聖母マリアだと考えられるようになった。この考え方は早くからなされていて、すでにパウロがキリストをアダムと対比させている（ローマ人への手紙 5：12～21）。アダムという一人の原罪がすべての人を罪に落としたように、イエスという一人の恵みによってすべての人が義とされた。イエスはこれによって「新しいアダム」ともいわれる。

マリアの方も、すでに2世紀のリオン司祭エイレナイウスによって、イヴが不信によって結んだものをマリアが信仰によって解放したと表現した。イヴは罪人、誘惑者としての女性の元型であり、マリアは清らかなものとしての女性の元型だった。

だが、これではイヴとマリアはまったく正反対になってしまう。マリアを「新しいイヴ」として、両者のイメージを重ね合わせるためには、もう一つのレトリックが必要だった。

それが「無原罪の宿り」である。アダムもイヴも、罪を犯したとはいえ、創られた時は神によって直接、命を吹き込まれていて、それ以後のすべての人間とは、根本的に生まれ方が違っている。それゆえに、「アダムとイヴ」とパラレルになるべき「イエスとマリア」の出生も、原罪にまみれたものであってはならなかった。マリアが聖霊によって「新しいアダム」イエスを処女懐胎したという信仰は早くに確立したが、同時に、「新しいイヴ」であるマリア自身も、原罪なくして生まれなくてはならなかった。マリアが、その母であるアンナの胎に無原罪で宿ったという信仰は、こうして生まれたのである。

また、マリアが死後イエスに招かれ、天使たちによって天に引き上げられたというマリア被昇天の考え方もイヴが楽園を追放されたことと対になって、神学のバランスを回復させる。その意味で、イヴからマリアへの系譜は、一つの回心の物語であるといえる。

(3) シェバの女王の系譜

キリスト教世界にとっての原初の女性であるイヴの後、新約聖書でマリアが登場するまでの間に、旧約聖書にはもう一人、長く信仰の対象になった女性がいた。シェバの女王である。

シェバとは、今のエチオピアあるいは南イエメンあたりを指し、回心を意味する。この女王は、「列王記」に出てくる。紀元前10世紀半ばのソロモン王の時代にソロモンは、オフィルの国にある宝を得るために船を造らせたという記述（列王記上9）があるが、それがシェバの地域である。このシェバの国でソロモンの噂を聞いた女王は、王に会いにエルサレムまでやってきた。（同上10：2～10）。彼女は、多くの金と香料をもってやってきた。そしてソロモンに次々に質問し、ソロモンはそのすべてに正しく答えた。彼女は感嘆し王をたたえた。王は女王に贈り物をし、彼女の望むものをすべて与えた。

このような女王がどうして、その後のヨーロッパにまで大きな影響力を持ち続けたのだろうか。それは、イエスが新約聖書で知恵との関係で、ほかならぬ彼女に言及したとされるからである。イエスは、今が邪惡な時代であると説き、「南の女王が、今の時代の人々と共にさばきの場にたつて、彼らを罪に定めるであろう。なぜなら彼女はソロモンの智恵を聞くために地のはてからはるばるやって来たからである。」（Q＝マタイ12：42、ルカ11：31）と述べた。

イエスのこの言葉によって、シェバの女王は、キリスト教世界の最後の審判にかかわる重要人物になった。12世紀以降のヨーロッパで、聖母マリアの信仰が盛んになったのと時を同じくして、王と王妃のレリーフは、王室のシンボルとなり、また「質問と答え」の比喩が智恵と学問を象徴して広まった。

神学的にもシェバの女王は人気のある人物になった。先にも述べたように、そもそもキリスト教では、旧約聖書に出てくるすべての出来事や人物は、新約聖書を準備するものだと解釈される。ソロモンとシェバの女王の会いは、ユダヤとオリエントの出会いであるから、生まれたばかりのイエスと東方の三博士の出会いを予告するものであるとされた。シェバの女王も東方の三博士も、異教徒でありながら贈り物をたずさえて長旅をし、それぞれソロモンの智恵を承認したりイエスの神性を確認したりしたからである。

シェバの女王はその後ゲテ、フローベルなどの大文学者たちによって取りあげられた。彼女は三千年間も人々を魅了し、その多様性は、知恵との関係で、清らかな聖母マリア信仰に反映されていったのである。

(4) 聖アンナの系譜

聖アンナはマリアの母である。「神の母」のそのまた母であることから、民衆の根強い信仰の対象になった。イエスとの関係の近さから、しばしば神学上のコントロールを受けてきた聖母マリア信仰と違って、規制が穏やかな分、キリスト教布教以前の土着的な異教の母神を自らの内に自由に継承することができた。聖アンナは、5世紀ごろのオリエント世界では、すでに女神のように礼拝されていたらしい。

アンナという名はヘブライ語のハンナ（恩寵、恵みを表す）に由来し、旧約聖書の預言者サムエルを主の恵みによって身ごもった女性の名である（サムエル記上1－2章）。マリアの母である聖アンナの方は、もともとは新約聖書のなかにでてくる人物ではないが、マリアの母として典礼上、聖女としての地位を与えられるようになった。

また、マリアが原罪なしに、聖アンナの胎に宿ったという教義は、本来は、マリアをイエス

を懐胎する無垢の聖なる神殿とするための、抽象的な思考操作だったのだが、民間信仰のレベルでは聖アンナもマリアを処女懐胎したかのように解釈して、聖アンナを神格化していったのである。

第4章 民間信仰におけるマリア

この章では、民間信仰の中のマリアが人々にとってどんな存在であったのかを、ヨーロッパを中心に見ていきたいと思う。

(1) 三位一体とマリア

キリスト教の根本主義は、父と子と聖霊の三位一体による救いである。三位一体の中に聖母マリアの場所はない。キリスト教の教えの中でもマリアは言及されなかった。では、マリアは三位一体とどう関わっているのだろうか。錬金術の世界では、マリアは三位一体に加わる四人目のパーソナリティであるといわれる。古代世界では、世界の構成を三元素に還元するのではなく四元素以上に分けることが多い。たとえば、空気、水、土、火などである。だからマリアが、大事な元素の一つであるというのは自然なことなのである。

しかし、このように錬金術を出さなくても、民間信仰のなかで、マリアは堂々と三位一体の中心をなしていた。最も有名で、代表的なのは「三位一体の無原罪の百合」である「三つのアヴェ・マリアのノートルダム」と言われる信仰運動である。

「三つのアヴェ・マリア」とは、アヴェ・マリアの祈りを、マリアの「力」と「智慧」と「慈悲」にちなんで三度唱えることをいう。朝晩これを唱え、それによって善き死を迎えることができた。聖母信仰は病の癒しにも向けられたが、何よりも臨終に際して力を発揮するとされていた。中世以来、多くの人にとって、死後の地獄落ちは最大の恐怖だった。この恐怖を緩和するためには、人々は「三つのアヴェ・マリア」に祈りをこめたのである。

(2) 生と死とマリア

誕生と臨終は、人間にとって大きな節目である。このようなとき、人々は聖母を最も必要としてきた。各種の聖人や天使もこのようなとき必要とされたが、マリアは「母」であることから、より身近にすることができる対象となったのである。しかも、マリアは、我が子が刑死するのをみた悲劇の母であったので、人は苦しみや悲しみや恐怖の淵にある時に、自分たちと同じような辛さを味わったことのあるマリアに頼ったのである。

産褥死は長い間女性の死亡率の第一位を占めるものだった。マリアは人間の母であるが、イエスという神の母でもあるので原罪をまぬがれていると伝統的に考えられている。それゆえに、マリアは誕生の場面でも出産の苦しみと危険を緩和する存在であった。

このようにマリアが真に威力を発揮するのは、必ずしもはなばなしい奇跡の場ではなく、人間の出生と死に関わる極めて個人的な場面においてだったのである。

(3) マリア文学

マリア文学は12世紀半ばに生まれ、2世紀ほどのあいだ、宗教界だけでなく一般民衆の間にも広く浸透した。マリア文学は、大きく分けて二種類ある。

一つは、公の聖職者の手による著作であり、代表的なものに、ピュイ司教で1265年に法王ク

レメンス四世となったギイ・フソワによる『ノートルダムの七つの歎び』というものである。

もう一つは、ラテン語ではなくヨーロッパ各地方の俗語で書かれた、聖母マリアを主要登場人物とする膨大な説話物語群である。そのベースとなったのは、オリエント起源の新約聖書外典や教父文学のマリアに関するテキストの翻訳翻案ものと聖母の主要聖地で起こったさまざまな奇跡の記録である。代表的なものに、ジャン・ル・マルシャンの『シャルトルのノート』やゴチェ・ド・コワンスイの『ロカマドールのノートルダムの奇跡』『ノートルダムの奇跡』などがある。『ノートルダムの奇跡』はヨーロッパ全土で広く読まれ有名な『マリア詩集』に影響を与えた。

これらの物語は、自由な表現に満ち、中世末期の人々の日常生活や信仰生活についての貴重な資料を提供するものとなっている。伝染病がはやった時は、教会に何千もの蠟燭が灯されて、昼夜祈禱が行われたことや、奇跡の治療が実現されたときには、民衆、貴族、ブルジョワが一体となってマグニフィカートやテ・デウムを唱和したことがわかる。

また、個人的な奇跡も数多く語られた。マリアの説話があらゆるヴァリエーションを含んで広まっていたのには、教会による教育的配慮も働いていた。13世紀初めには、吟遊詩人の語る肉体の愛や欲望の説話が流行していた。教会はそれに対抗するために、マリアをシンボルとする天の貴婦人への純粹で清らかな愛を、俗語で広めたのである。

マリアの説話文学はルネサンス時代まで続き、その後ポピュラー文学の一つの典型となった。これは19世紀まで受け継がれ、大衆文学として根づいていった。

(4) 七つの痛みのマリア

数多くある民間信仰のマリアの一つに「七つの痛み（嘆き、苦悩）のノートルダム」というものが存在する。これは、マリアの様々な苦悩に積極的に心を寄せようという信仰で、15世紀のフランドル地方で始まった。マリアの生涯における七つの苦しみ、心の痛みに思いを馳せて霊的な省察を深めようというものである。

七つの痛みとは、シメオンの預言、エジプトへの逃避行、少年イエスと神殿ではぐれたこと、イエスの十字架の道行、十字架上での死刑、死んだイエスを十字架から降ろすこと、そして、イエスの埋葬である。

マリアの苦しみを追っていくこの信仰は、カトリックの聖母像に大きな変化を与えた。それまで、冠を戴くか後光を背にしている幼子を抱く母親像であったものが、「嘆きの母」（スターバト・マーテル）の像に変わってしまった。一時期のヨーロッパでは涙を流さぬマリアの姿を見つけるのが難しいほどだった。

七つの痛みの聖母像の中には、一時盛んになったもののその後早く見られなくなったものもある。むごたらしく殺された一人息子の見納めに絶望に凍り付いたマリアの顔は、もはや無垢や慈愛に満ちた母のものではなく、ましてや悪魔を退治する勝利の女神のものでもなかった。このため、14世紀に現れてはじめて15世紀に広まった埋葬図は、宗教改革を経て、16世紀後半のカトリックの改革が、死のイエスより復活の勝利のイエス像を強調するという方針をとるようになってから姿を消した。

しかし、17世紀には、十字架から降ろされたイエスの遺体を膝に抱くピエタ像が全盛になった。イエスの遺体が、像の中心人物であるマリアの膝の上に置かれ、マリアの嘆きが全面的に表に出された。マリアは、時代の「泣き女」として民衆のあらゆる悲しみや苦しみを昇華し続

けたのである。

(5) 「黙示録」とマリア

「黙示録」とマリアの関係は、民間信仰とマリアを考えるなかで、神秘的で謎に満ちている。「黙示」とは本来、神が歴史の中に姿をあらわす「啓示」を意味する。その意味では聖書全体が「黙示録」であるが、いわゆる黙示文学というのは、一般に、神が少数の選ばれた人間に垣間見せた彼岸の世界の情報であると考えられていた。「黙示録」はシンボリックな表現に満ちていて、解釈は難しい。

しかし、地獄や悪の描写が凄まじいので、一種の幻想文学としてヨーロッパ文学に大きな影響を与えた。特に神の激しい怒りを入れた七つの鉢を持った七人の天使が、鉢を傾けて七つの災害を起こすシーン（人の体はできものに覆われ、太陽は人を焼き、水が枯れる。諸国の王たちがハルマゲドンと呼ばれる場所に招集されると、雷鳴と大地震が起こり、巨大な雹が降る、というような終末的な場面）が与えた影響は大きい。

ところが、このような恐ろしいイメージの詰まった「黙示録」から、その後のマリアに決定的となった姿が抽出されることになった。

「黙示録」の一章から十一章までは、ある解釈では旧約聖書の出来事を説明するといわれている。その中でイエスは、「ユダの獅子」などのようにユダヤ人としての称号を呼ばれている。十三章から二十二章までの後半は、キリスト教会の記述であるといわれ、それによれば、イエスは「国々の王」という称号で呼ばれていて、キリスト教が、ユダヤ民族を離れて普遍宗教の道を歩みだしたことが分かる。そして、この前半と後半をつなぐ十二章に「ひとりの婦人」が現れるのである。その婦人（あるいは「女性」以下同じ）は、頭に太陽を戴いて足元に月を置き、十二の星の冠をかぶるという壮大な構図のもとに登場する。

この婦人は、メシアをこの世に生み出した後でキリスト教会という集合体になった神の民を示している。彼女は、勝利と苦痛を同時に表している。この婦人がマリアと同一視されたのである。

この婦人が登場する宇宙的な広がり、後代のマリア像に大きな影響を与えた。マリアは等身大の娘ではなく、惑星の冠を戴いたり、手に地球を持っていたり、また大きく広げたマントの中に、すべての人間を包み込む巨人としても表される。マリアは教会の母でもあり、教会そのものでもあった。キリスト教世界の産みの母であり、すべての信者の母だと見なされた。

「黙示録」の中では、悪魔の化身である龍がこの婦人に腹を立てて、荒野へ追いかけていく。彼女を滅ぼすことができないので、イエスの証しを持っている者たち（＝キリスト教徒たち）に対して戦いをいどんだのである。この記述によって、マリアがすべてのキリスト教徒の母であり、彼らを悪魔の手から守ってくれるというイメージが形成された。

キリスト教には、イエスとその弟子であるペテロ、さらにペテロの継承者であるローマ法王に連なる明快な顕教に対して、「ヨハネの黙示録」に代表されるように、シンボリックで解釈技術の伝承を要する密教に相当するものがあるという考え方が、早くから存在した。これはペテロの教会とヨハネの教会と称されることもある。「太陽とイエス」を表わすペテロの教会と表裏一体をなしているのが「月とマリア」のヨハネの教会なのである。

この考え方は異教的な二元論の伝承と結びつき、錬金術や魔術の中でも採用され、カトリック教会でもしばしば異端とされた。しかし「月とマリア」の魅力によって、秘教的な伝統は絶

えなかった。言い換えると、「ヨハネの黙示録」と聖母マリアのおかげで、ヨーロッパ精神世界は伝統と想像力を損なわず、キリスト教世界にも異教的なものを伝えつづけることができた。

「ヨハネの黙示録」の「婦人」（あるいは「女性」）をマリアに結びつけるのには、「ヨハネの福音書」の中で二度にわたってマリアを指して使われる「婦人」の言葉である。イエスはカナの婚礼の場面で、息子に語りかけるマリアに「婦人よ、…私の時はまだ来ていません」（2：4）と答えた。また、十字架の上で、マリアをヨハネに託したときも「婦人よ、…これはあなたの息子です」（19：26）と呼びかけている。これは母に対する息子の言葉としては奇異である。だからこそ人々は、これが後の「黙示録」の「婦人」を読み解くためのキー・ワードなのだと考えた。

もう一つ、「ヨハネによる福音書」の中のイエスのたとえ話の中でも「子を産む婦人」が出てくる。「女が子を産む場合には、その時が来たというので不安を感じる。しかし、子を産んでしまえばもはやその苦しみを覚えてはいない。一人の人がこの世に産まれた、という喜びがあるためである。」（16：21）という話の中の「その時」は、イエスの復活という新しい命の誕生の時であるとされる。これはカナの婚礼での「私の時」にも通じる。イエスの復活の時とは、救済としての教会の始まりの時でもある。イエスが母マリアをヨハネに与えたのは、神が人間に「教会」を与えてくれたという比喻だとされた。

マリアは星を戴く宇宙的な存在であるだけでなく、人間の集合体である社会的な存在にもなり、人々はマリアを通して宇宙に触れ、民族との連帯を深りつづけたのである。

第5章 おわりに

マリアは七つのヴェールを被っていて、その真の顔を見ることはむずかしいといわれているそうだが、今回の卒業論文で「マリア」を取りあげてみて、私もほんとうに、そのように思う。とにかく、ヴァリエーションに富んでいて、参考文献もたくさん見つけることができた。そのルーツを遡ってみても様々なマリアと出会った。普段身近に感じていたマリアがこんなにもたくさんの顔を持っていたとは、驚きである。

私はマリアを知ること、ただ単にマリアだけでなく、その周囲の、マリアと関わる人々を知ることにもなるのだと思った。キリスト教国の人々は、人生のことあるごとにマリアに祈ってきた。その祈りから、当時の人間観、倫理思想、習俗、伝承、社会など様々なことが見てとれる。つまりマリアは、欧米文化の変様を知る鍵のひとつなのだと思う。詩、音楽、絵画など様々な形で表され、これまで度々私たちの身近にいたマリアに私はうなずける。

マリアについてどのような解釈や立場があるにせよ、これまで何百万人という人々の魂のなかに宿った女性であることは間違いない。私はこのように現代の私たちと少しも変わらず弱さを抱えて生きていた人々に深い愛着を感じるし、また、このような人々の心に絶えず生きてきたマリアに対してもそう感じる。私はこの先、いままで以上にマリアを思い、生きていくことになるだろう。

参考文献表

新共同訳「聖書」日本聖書協会

植田重雄著『聖母マリア』岩波新書、1987年

石井美樹子著『聖母マリアの謎』白水社、1988年

土屋博著『聖書のなかのマリア』教文館、1992年

E. モルトマン＝ヴェンデル、H. キュング、J. モルトマン編、内藤道雄訳『マリアとは誰だったのか』新教出版社、1993年

高尾利数著『キリスト教を知る事典』東京堂出版、1996年

八木誠一訳「ヤコブ原福音書」、荒井献編『新約聖書外典』講談社文芸文庫、1997年

(卒論指導教員 山田耕太)